



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



今日のみことば

年間第23主日 A年(2023年9月10日)

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エゼキエル書 33章7—9節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 13章8—10節

福音朗読：マタイによる福音書 18章15—20節

兄弟を得る

三つの朗読から

第一朗読では「もし…ならば」という仮定法を用いながら、見張り(預言者)として果たさなければならぬ言葉を語る使命が明らかになります。神は悪人に滅んで欲しいとは思っていない。むしろ生きて欲しい。それ故、そんな神の本心を伝えなければならないのです。

第二朗読には「借り」ということばが登場します。人に対する借りは返さなければなりません。「すべての人に借りとして負っているものは返しなさい。貢ぎを納めるべき者には貢ぎを、税を納めるべき者には税を、恐るべき者には恐れを、敬うべき者には敬意を返しなさい」(ロマ13章7節)とあるようにです。しかし、愛することへの借り、負い目は、自分では返せません。いくら隣人を愛したところで、神から愛されたという借りを完璧に返すことはできないのです。それほど神からの愛は大きいのです。

福音朗読では、自分に対して罪、過失を犯した兄弟を戒め、諷めるのが今日の福音のテーマではないでしょう。むしろ、罪により滅んでしまわないように、罪により信仰共同体から離れてしまわないように、罪により兄弟ではなくなってしまうように、忠告するのは、一人ダメなら二人で。二人ダメなら三人で。それでもダメなら教会を通じて。こうして、人に命を与えようとする御父の御旨が実現していきます。「兄弟を得る」ことが福音のテーマです。

説教：兄弟を得る

15節の「兄弟」は、肉親を指すのではなく、同じ信仰を有する者を意味します。今日の朗読箇所の前に「このような幼子の一人を」(5節)、「これらの小さな者の一人を」(10節)、さらに直前

の「そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない」(14節)の「小さな者」を「兄弟」と言い換えています。

15節－17節は「もし…ならば」を表す「エアン」が五回登場します。当時の信仰共同体の状況をつぶさに列挙しているようです。すなわち、「罪を犯した」兄弟、「言うことを聞き入れた」兄弟、「聞き入れ」ない兄弟、「それでも聞き入れない」兄弟、「教会の言うことも聞き入れない」兄弟などが信仰の共同体の中に実際にいたのです。そして、18節で「はっきり言っておく」と結論が示されます。

同じく15節にある「罪」に注目してください。この言葉は「過ち」、「過失」と理解してよいでしょう。朗読の直前の箇所での「迷い出た羊」(10－14節)とは、罪を犯した「兄弟」のことを指しています。しかし、神はそのような「小さな者」に心をかけるのですから、その事実を「兄弟」に知らせなければなりません。それが「忠告」です。こうして、この罪を犯した「小さな者」は「兄弟」となります。

17節の「教会」は、もともと「呼び集められた者の集い」という意味です。もちろん、イエスさまの時代には教会はまだ存在していないので、これは福音書が成立した頃の信仰共同体が実践していた、「罪」を犯した兄弟への関わりが背景にあるのでしょうか。しかし、18章全体がお弟子さんたちに向けてのイエスさまのお話しですので、弟子たちが各地で作ることになる信仰共同体のあり方を描いていると考えられます。ですから教会を信仰共同体と捉えて、イエスさまの命令と理解することはできるでしょう。

18節と19節の「あなたがた」は、お弟子さんたちを指します。つまり、信仰共同体の指導者としての任務を与えられたお弟子さんたちには、16章19節でペトロに与えられた教会の頭としての権能と同じものが与えられていきます。父の御心、み旨をおこなうのが教会の使命となります。

そうしますと19節の「あなたがたのうち二人が地上で心を一つにして」は興味深いです。なぜならユダヤ教の伝統では、集まって共同の祈りをささげるには成人男子10名が必要だったからです。イエスさまにもとづく信仰共同体にはその制限がありません。信仰共同体は祈る場所です。「心を一つにして」の祈りを聞き入れ、かなえてくださるのは天の父です。

おしらせ

10月29日は、「ロザリオ祭」として、ミサの時間は7時と10時半だけです。

アントニオ会館の庭でミサをささげて、軽食を楽しみましょう。